［花き部門］ 農業研究所ホームページへ

１．スイートピーは難落蕾性個体から採種すると、次世代で難落蕾性個体が多くなる

［要約］
スイートピーは品種や系統によって落蕾程度が異なり、同一品種でも落蕾の難易が異なる個体が混在する。難落蕾性個体を選抜し、それから採種すると次世代で落蕾しにくい個体が多くなる。

［担当］ 岡山県農林水産総合センター農業研究所　野菜・花研究室
［連絡先］電話 086-955-0277
［分類］ 情報

［背景・ねらい］
スイートピーでは生育初期の着蕾の不安定化による生産性の低下が問題となっており、特に冬季の寡日照に起因する落蕾対策は急務である。一方、現地の多様な品種の中には落蕾しにくい難落蕾性品種が含まれているものの、採種年や採種農家によって落蕾程度が異なる。そこで、品種や系統の落蕾性の違いを明らかにするとともに、落蕾性の継代の様相を明らかにし、自家採種における難落蕾性の安定化を図る。

［成果の内容・特徴］
１．春季の遮光処理によって、日照量に起因する品種・系統の明瞭な落蕾性の違いを知ることができ、遮光処理条件下と冬季寡日照期の落蕾性は中程度の正の相関を示す（Ｒ＝0.662）（図１）。
２．県内で収集したスイートピー28品種・系統の落蕾性には品種間差があり、「ふじむすめ」等は落蕾しにくく、「シリウス」等は落蕾し易かった。また、同じ品種でも採種農家が異なる系統では落蕾性が異なった（図１）。
３．品種の落蕾性の難易に関わらず、いずれの品種においても落蕾性が異なる個体が混在する（データ省略）。
４．同一品種内の難落蕾性個体群と易落蕾性個体群から別々に採種すると、品種によっては次世代においても落蕾性が継承され（図２）、難落蕾性個体群から採種すると落蕾しにくい個体が多くなり、易落蕾性個体群から採種すると落蕾しやすい個体が多くなった（図３）。

［成果の活用面・留意点］
１．難落蕾性の個体群から自家採種すると次世代では落蕾しにくい個体が多くなるが、落蕾しやすい個体も分離する。
２．現地の栽培では遮光処理による個体選抜は出来ない。このため、難落蕾性個体の選抜は、冬季寡日照期（12～１月）の落蕾の発生した頃に実施し、ラベルを付して春に自家採種する。

［具体的データ］

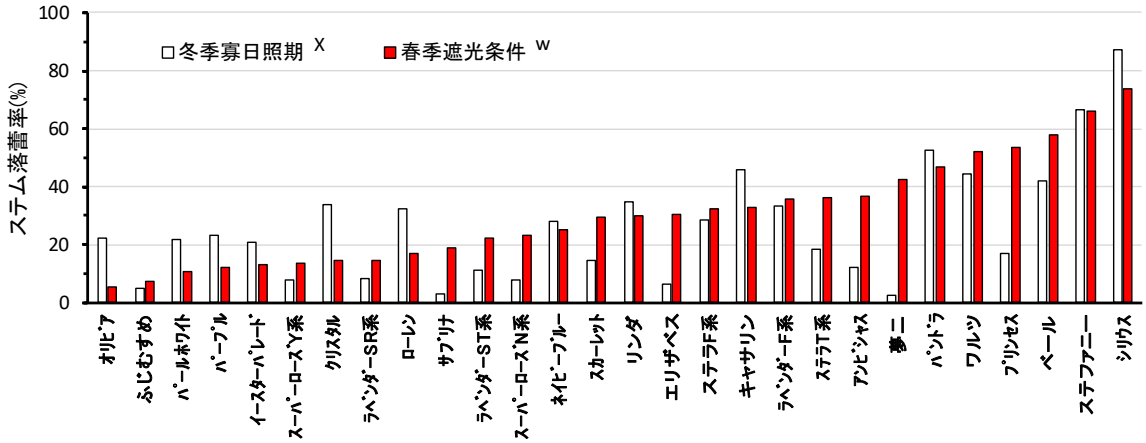

図１　現地収集品種・系統[z]の落蕾性の違い[y]（2018年作）

[z]同一品種の〇系は採種農家の異なる系統。

[y]加温促成栽培で冬季寡日照期と翌２月遮光処理時のステム落蕾率（各ステムの着蕾数に占める落蕾数）を調査

[x]開花初め～１月末のステム落蕾率　[w]遮光率91%で５日栽培し、遮光処理時にステム長5cmの節の上下７節のステム落蕾率

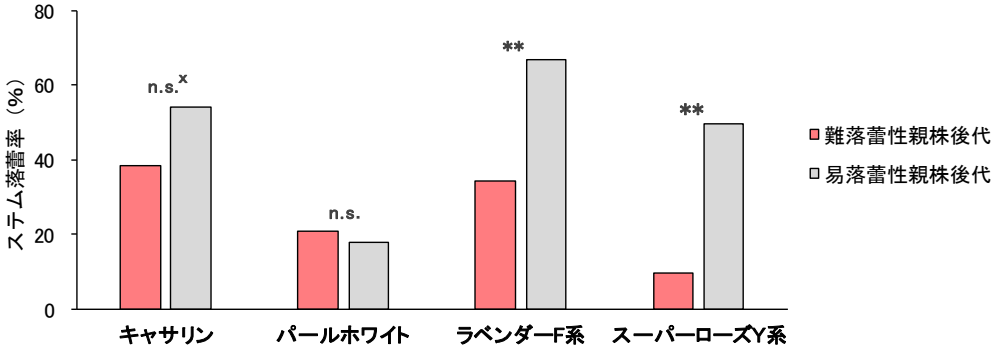

図２　親株の落蕾性の違い[z]が次世代の冬季寡日照期[y]のステム落蕾率に及ぼす影響（2019年作）

[z]ステム落蕾率が冬季は20%未満かつ遮光条件では40%未満の個体群を難落蕾性親株、ステム落蕾率が高い個体群を易落蕾性親株として集団採種　[y]着蕾開始～１月末　[x]**は1%水準で有意差あり n.s.は有意差なし(逆正弦変換データをt検定 n=17～28)

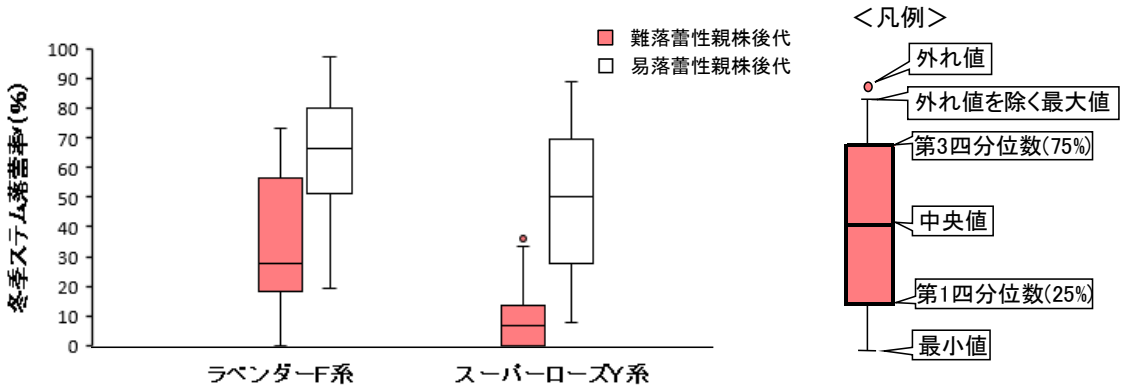

図3　落蕾性の異なる親株から採種した次世代個体の冬季落蕾性[z]の分布

[z]着蕾開始～１月末

[y]各ステムの着蕾数に占める落蕾数

［その他］

研究課題名：特産花き新品種の育成

予算区分・研究期間：県単・平 30 年度～継続

研究担当者：土居典秀